

正法眼藏における尽十方界

粟 谷 良 道

ここに述べる尽十方界とは尽十方世界のことであり、尽界とも略される。この語は道元の著書『正法眼藏』の中において、多々用いられており、本論文では、この尽十方界という語が『正法眼藏』の中において、どのように用いられているかを明らかにしたい。

ここに問題となる尽十方界は、周知のように、道元以前にも用いられている。このことは『正法眼藏』の中に、

- (1) つひにみちをえてのち、人にしめすにいはく、尽十方世界、是一箇明珠。ときに僧問、「承、和尚有言、尽十方世界、是一顆明珠。学人如何会得。」師曰、「尽十方世界、是一顆明珠、用_レ会作_レ麼。」師、来日卻問其僧、「尽十方世界、是一顆明珠、汝作麼生会。」僧曰、「尽十方世界、是一顆明珠、用_レ会作_レ麼。」師曰、「知、汝向_二黑山鬼窟裏作_二活計_一。」いま道取する尽十方世界、是一顆明珠、はじめて玄沙にあり。(一顆明珠、道元禪師全集上・六〇頁)
- (2) 大宋国湖南長沙招賢大師、上堂示衆云、尽十方界、是沙門

正法眼藏における尽十方界(粟 谷)

眼。尽十方界、是沙門家常語。尽十方界、是沙門全身。尽十方界、是自己光明。尽十方界、存_二自己光明裏_一。尽十方界、無_二一人不是自己_一。仏道の参学、かならず勤学にすべし……(光明、道元禪師全集上・一一六頁)

- (3) 先師古仏いはく、いま諸方長老は、照古なし、照今なし、仏法道理不會有なり。尽十方界等恁麼举、那得_レ知。他那裏也未_二曾聽_二相似_一。(諸法実相、道元禪師全集上・三七二頁)

- (4) 長沙いはく、尽十方界、真実人体。尽十方界、自己光明裏。(諸法実相、道元禪師全集上・三七二頁)

とあることから伺い知ることができる。まず、(1)に示した箇所では玄沙とあるように、『景德伝灯録』巻第十八「福州玄沙師備禪師」には、

僧問。承和尚有言。尽十方世界是一顆明珠。学人如何得会。師曰。尽十方世界是一顆明珠用会作麼。師来日却問其僧。尽十方世界是一顆明珠汝作麼生会。対曰。尽十方世界是一顆明珠用会作麼。師曰。知汝向山鬼窟裏作活計。(大正藏五一・三四六下)

とあり、玄沙師備の語であることは明らかである。次に、(2)に示した箇所では長沙招賢大師とあるように、『景德伝灯録』卷第十「湖南長沙景岑禪師」には、

上堂曰。我若一向挙揚宗教。法堂裏須草深一丈。我事不獲已。所以向汝諸人道。尽十方世界是沙門眼。尽十方世界是沙門全身。尽十方世界是自己光明。尽十方世界在自己光明裏。尽十方世界無一人不是自己。我常向汝諸人道。三世諸仏共尽法界衆生是摩訶般若光。光未発時汝等諸人。向什麼処委。光未発時尚無仏無衆生消息。何処得山河国土来。（大正蔵五一・二七四上）

とあり、長沙景岑であることは明らかである。次に、(3)に示した箇所では先師古仏とあり、天童如浄を指すと思われるが、『如浄語録』等にはこの引用文が見あたらない。この一節は道元が如浄より直接聞いた言葉を述べている箇所であると思われる。次に、(4)に示した箇所では長沙の語として述べているのであるが、『景德伝灯録』の長沙章には見あたらず、同・卷第二十一の「福州臥龍山安国院慧球寂照禪師」には、師問了院主。只如先師道。尽十方世界是真实人体。爾還見僧堂麼。了曰。和尚莫眼花。師曰。先師遷化肉猶暖在。（大正蔵五一・三七二下）

とあり、慧球の師は玄沙師備であることから、この箇所の引用が果して道元の述べているとおり、長沙からの引用であるかは疑問の残るところである。なお、『玄沙師備禪師広録』

卷下には、

我向汝説。尽十方世界。都来只是汝真实人体。何処更有一法。

（続蔵一二六・一九六右下）

とあることから、なお疑問の残るところである。

このように、道元は尽十方界という語を長沙景岑、玄沙師備、天童如浄からの引用として述べているのであるが、これらの箇所を見るかぎり、長沙や玄沙の述べている尽十方界とは一顆明珠であり、沙門の眼であり、沙門の全身であり、自己の光明であり、真实人体であるということが出来る。

道元はまた、これらの引用に基づき、長沙や玄沙と同じように尽十方界を述べている。すなわち、『正法眼蔵』に、

- (1) 尽十方界は是自己なり、是自己は尽十方界なり。廻避の余地あるべからず。（光明、道元禪師全集上・一一九頁）
- (2) いま尽十方界は、沙門一隻の真实体なり。（神通、道元禪師全集上・三一八頁）
- (3) 一顆明珠はこれ尽十方界なり。（十方、道元禪師全集上・四七八頁）
- (4) いはゆる仏祖の光明は、尽十方界なり、尽仏尽祖なり、唯仏与仏なり。（光明、道元禪師全集上・一一七頁）

とあり、尽十方界が自己であり、沙門一隻の真实体であり、一顆明珠であり、仏祖の光明であると述べている。また、「身心学道」の巻には「いまのなんぢ、いまのわれ、尽十方

界眞実人体なる人なり」(道元禪師全集上・四〇頁)とあるように、尽十方界眞実人体については、特に一種の成句のように用いている。ところで、道元の述べる尽十方界は、長沙や玄沙の述べている意味での尽十方界ばかりではない。すなわち、「身心学道」の巻には、

尽十方界は八万四千の説法蘊なり、八万四千の三昧なり、八万四千の陀羅尼なり。八万四千の説法蘊、これ転法輪なるがゆゑに、法輪の転処は互界なり、互時なり。方域なきにあらず、眞実人体なり。(道元禪師全集上・四〇頁)

とあり、最終的には尽十方界が眞実人体であると述べながらも、尽十方界が八万四千の説法蘊であり、八万四千の三昧であり、八万四千の陀羅尼であると述べている。また、「発無上心の巻」には、

草木瓦礫と四大五蘊と、おなじくこれ唯心なり、おなじくこれ実相なり。尽十方界・眞如仏性、おなじく法住法位なり。(道元禪師全集上・五二八頁)

とあり、尽十方界が法住法位であり、眞如仏性であると述べている。法住法位とは実相と同じ意味であり、このことから、尽十方界とは実相のことであり、唯心のことであり、草木瓦礫のことであり、四大五蘊のことであるということができる。また、「坐禅箴」の巻には、

飛空は尽界なり、尽界飛空なるゆゑに。(道元禪師全集上・一〇

正法眼藏における尽十方界(粟谷)

〇頁

とあり、尽十方界が飛空であると述べている。このことに關連して、「身心学道」の巻では「去来は尽十方界を兩翼三翼として飛去飛来す、尽十方界を三足五足として進歩退歩するなり」(道元禪師全集上・四一頁)と述べており、尽十方界は飛去飛来であり、進歩退歩であることができる。また、「授記」の巻には、

授記これ破顔微笑なり、授記これ生死去来なり。授記これ尽十方界なり、授記これ徧界不曾藏なり。(道元禪師全集上・一九六頁)

とあり、尽十方界が授記であり、破顔微笑であり、生死去来であると述べている。また、「三界唯心」の巻には、

釈迦大師道、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子。いまこの三界は、如来の我有なるがゆゑに、尽界みな三界なり。三界は尽界なるがゆゑに。(道元禪師全集上・三五四頁)

とあり、尽十方界が三界のことであると述べている。また、同処に「我有は尽十方界眞実人体なり、尽十方界沙門一隻眼なり。衆生は尽十方界眞実体なり、一一衆生の生衆なるゆゑに衆生なり」とあり、三界、我有、衆生の全てが尽十方界であるということになる。また、「仏経」の巻には、

いはゆる経巻は、尽十方界これなり。経巻にあらざる時処なし。(道元禪師全集上・四〇五頁)

とあり、尽十方界が経巻のことであると述べている。

このように、道元は種々な形で尽十方界を述べており、最早、長沙・玄沙の述べる尽十方界の域を脱している。これら六箇所及ぶ例のうち、尽十方界を真如仏性、法住法位、実相と述べている箇所は長沙、玄沙の説に全面的に従っているということが出来る。また、尽十方界を八万四千の説法蘊、八万四千の三昧、八万四千の陀羅尼、授記、経巻と述べという箇所は長沙・玄沙の説に基づきながらも、道元の発展解釈を見ることが出来る。ところが、尽十方界を草木瓦礫、四大五蘊、生死去来、三界と述べている箇所は、長沙・玄沙の説とは異なり、道元独自の解釈であるということが出来る。

ここに、尽十方界に対する道元の発展解釈が指摘されるのであるが、この尽十方界の尽について、「十方」の巻では、

この十方無尽なるゆゑに、尽十方なり。（道元禅師全集上・四七七頁）

と述べており、無尽の尽であることが理解される。道元の尽十方界に対する発展解釈は尽を無尽の尽と解釈するところに帰因していると考えることが出来る。すなわち、尽を無尽と解釈する包容性にこそ道元の立場があるということが出来る。

このように独自の解釈を展開してゆく道元の立場についてであるが、包容性を指摘することができると述べたものの、

「諸法実相」の巻には、

方便門は暫時の伎倆にあらず、尽十方界の参学なり、諸法実相を

拈じ参学するなり。この方便門あらわれて、尽十方界に盡十方界すといへども、一切菩薩にあらざればその境界にあらず。（道元禅師全集上・三六九頁）

とあり、尽十方界の参学は菩薩の境界でなければできないと述べている。また、「三昧王三昧」の巻には、

驀然として尽界を超越して、仏祖の屋裏に大尊貴生なるは、結跏趺坐なり。…中略…まさにしるべし、坐の尽界と余の尽界とは、はるかにことなり。この道理をあきらめて、仏祖の発心・修行・菩提・涅槃を弁有するなり。（道元禅師全集上・五三九頁）

とあり、尽界を超越することが出来るのは結跏趺坐であると述べている。ここに、菩薩の境界であること、結跏趺坐の実践であることの厳しい面を指摘することが出来るのである。

以上、まとめて述べると、まず、尽十方界の典拠について、『正法眼藏』では、長沙景岑、玄沙師備、天童如浄に求めている。次に、尽十方界の内容についてであるが、長沙・玄沙の説に全面的に従っている箇所、長沙・玄沙の説に基づきながらも発展解釈を加えている箇所、道元独自の解釈を述べている箇所のそれぞれを指摘することが出来る。この道元の尽十方界に対する解釈は尽を無尽の尽と解釈する包容性に基づくものであるが、道元はまた、尽十方界の真の理解は菩薩の境界と結跏趺坐の実践によってのみ達することができると結論しているのである。

（曹洞宗宗学研究所所員）